

中国貴州省西南部の苗（ミャオ）族と布依（パイ）族の食文化（第5報）

—— 体重・身長 ——

末田 香里・酒井 映子・八田 耕吉

Dietary Culture of the Miao and Bouyei Tribes in South-Western Guizhou Province of P. R. China (V)

— Weight and Height —

Kaori SUEDA, Eiko SAKAI and Kouichi HATTA

目 的

戦後の日本における体位の向上に食生活、栄養素摂取量が大きく関与してきた¹⁾。今回は、中国貴州省西南部の少数民族、苗族と布依族の食生活の一つの指標として、身長・体重を測定した。

方 法

1992年度の夏期調査（7月14日～30日）において、前報の苗・布依族の村を訪問し、苗族男性103名、女性89名、布依族男性221名、女性103名、計516名の体重・身長を計測した。

身長は、各訪問先の家庭の玄関の柱に布製のメジャーを押しピンで固定し、その前に立たせて計った。体重計は日本から持参した。肥満度の指標として Body Mass Index（体重kg／（身長m）²）をもちいた。

結 果

1. 苗族、布依族の体重・身長

図1に苗族の男性、女性の体重・身長を年齢別に示す。同時に1987年度の同年齢の日本人男性・女性の平均値を示す。日本人の平均の値が、苗族の上限の値という感じであった。男女とも日本人に比し小柄であった。

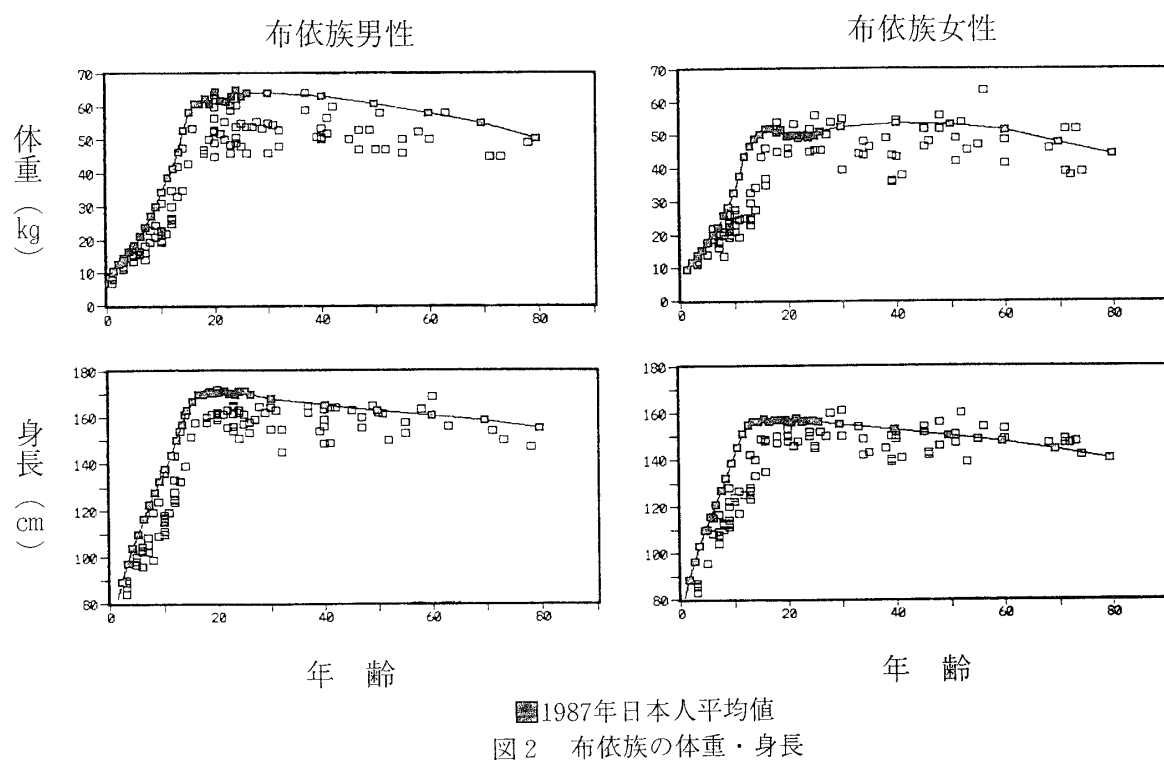
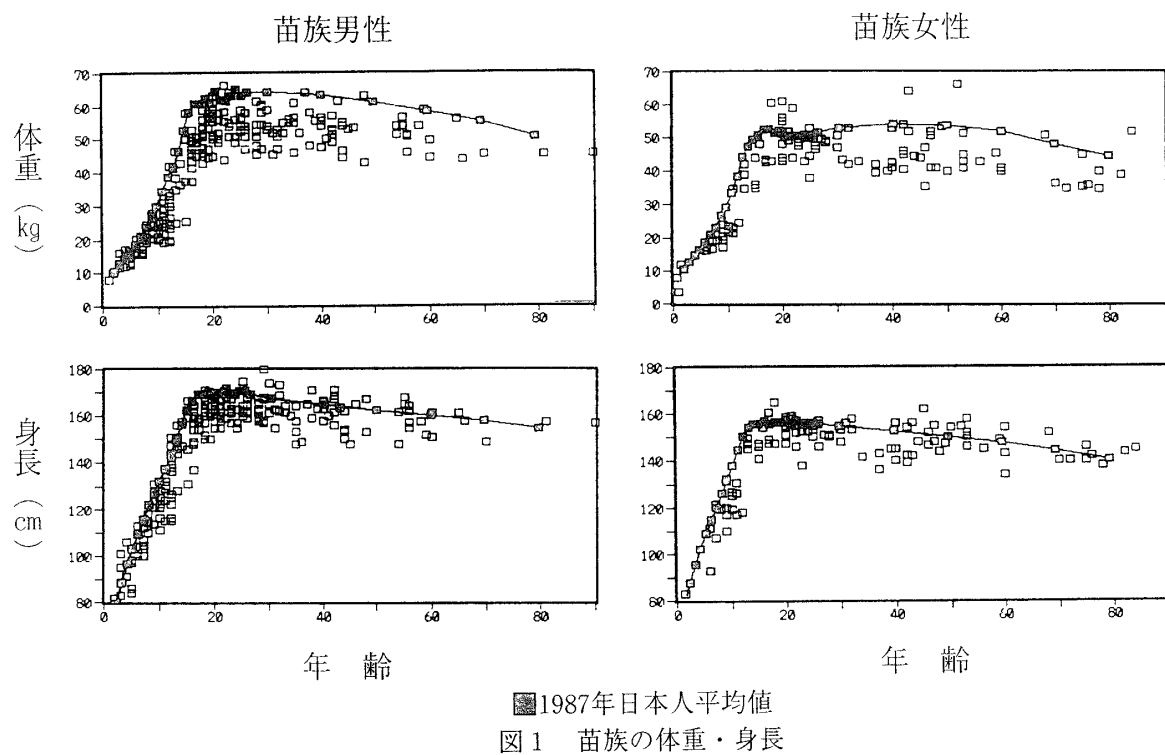
図2に布依族の体重・身長を示す。布依族の場合も、日本人の同年齢のものに比べて値が小さかった。身長も一番高い男性で180cmであったし、体重も70kgを越えることはなかった。肥満の人は見かけなかった。

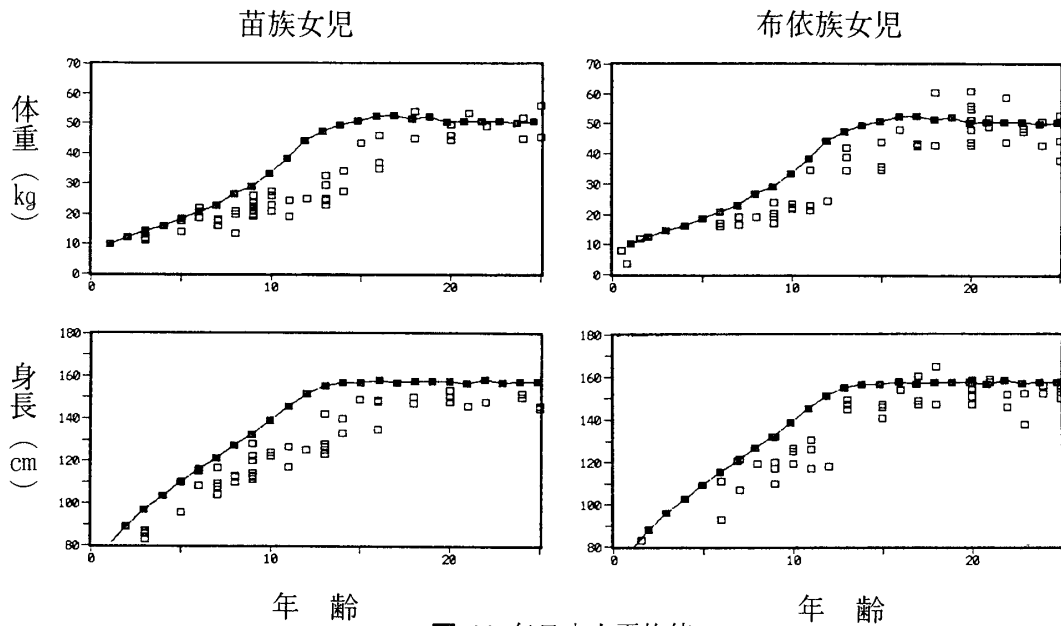
2. 苗族と布依族の体位の比較

1) 成長期の体重・身長

苗族、布依族の成長期についてスケールを拡大した（図3、4）。

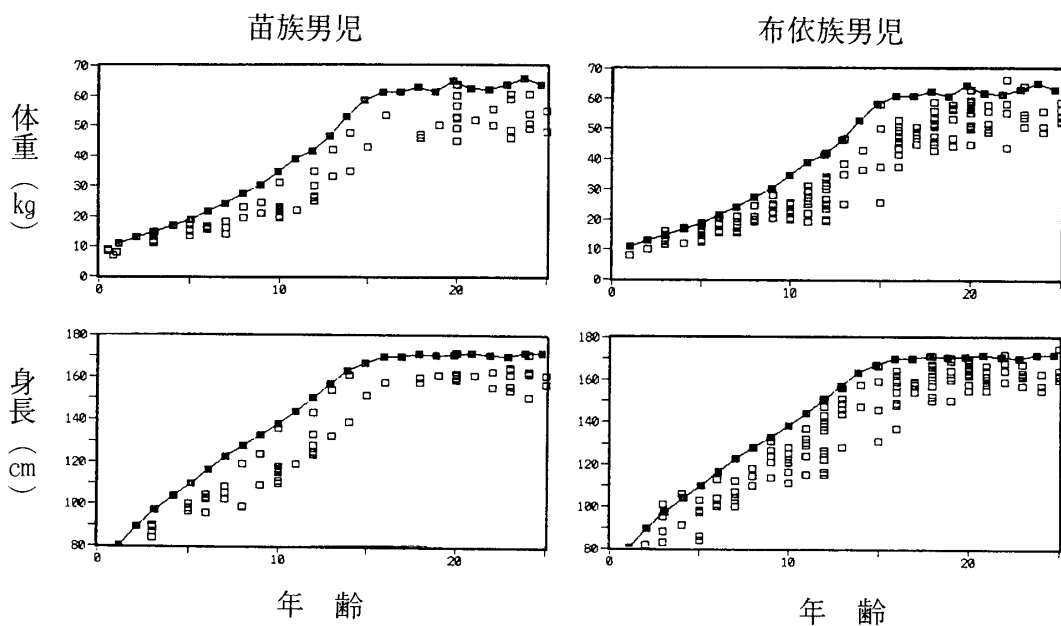
女兒の場合、両民族とも10歳から18歳までの間で日本人の同年令の平均値との差が大きかった。苗族で特に顕著であった。日本人の場合、体重・身長とも平均15歳位で成熟に達しその後体重も身長もふえていかないが、苗族女兒の場合、成長曲線が日本人のそれに比較して、右





■1987年日本人平均値

図3 女児の体重・身長



■1987年日本人平均値

図4 男児の体重・身長

側にシフトしており、成熟に達するのが2～3年遅い傾向がみられた。日本人と比較して、体格の発育水準が低く、発育速度が遅く、晩熟型であった。布依族女児の場合も、苗族女児ほどではないが、同じような傾向であった。

男児の場合、苗族男児は苗族女児ほど顕著ではなかったが、成長曲線が日本人のそれと比較して右側にシフトしており、成熟するのが2ないし3年遅れる傾向が認められた。布依族男児の場合も、苗族男児の場合と同様に、日本人のそれと比較して成熟が2、3年遅れる傾向が認められた。

以上、苗・布依族の成長期の体重・身長は、日本人のそれに比して、発育水準が低かった。晩熟型の傾向は、布依族より苗族のほうが顕著であり、又男児より女児において顕著であった。

2) 成人期の体重・身長

図5に25才以上の成人の平均値を示す。男性では、体重では苗族と布依族の平均値に差が認められなかったが、身長では布依族のほうが苗族より高い傾向が認められた。肥満度の指標であるBMIでも、布依族の方が小さな値で、スリムな傾向があり、我々がみた感じと一致した。

女性では体重、身長とも苗族、布依族に差は認められなかった。

考 察

1. 今回の測定の厳密さ

中国においては、従来より、統計資料はきわめてすくない。1回目、食物調査に訪れた地域住民の経済に関する統計ならびに児童の体重、身長に関する資料を調査に同行した役人に依頼しても手にいれることができなかった。そこで2回目の夏期調査において、食生活の一つの指標として、調査地の住民の体重・身長を測定した。

測定に際して、被検者に注文はつけずにそのままの状態で計測した。苗族の女性の場合、普段でも民族衣装を着ており、その民族衣装のまま、また耳飾り・首飾りなどの装身具もつけたまま、かぶりものをかぶっている場合もそのまま測定した。布依族の女性の場合、民族衣装を着ている頻度は苗族よりは少なく、また民族衣装も重量としては軽いと思われた。布依族の女性も頭にターバンを巻いている場合はそのままの状態ですべて計測した。従って、測定値は実際の体重、身長よりも大きな値として計測されたと推定される。男性の場合は、苗族・布依族とも、ズボンと上着を着衣しており、靴をはいたりとはなかったりくらいの差であった。男性の場合は、女性の場合に比し、精度よく測定できた。

2. 日本人との比較

同年齢の日本人の値(1987年)²⁾と比較して、苗族、布依族ともに体重・身長の値は小さく、小柄であった。日本人の平均値をこえる人は身長、体重ともにたまにしかなかった。肥満度の指標であるBMIをみると、両民族のBMIは日本人の平均値よりはるかに小さい値であった。ただ、女性の20代後半においては日本人、苗族、布依族がほぼ似たような値を示したが、これは例外で、背景には日本の若い女性の「やせ志向」があると思われる。

特に思春期において、日本人の平均値とのあいだに身長・体重にひらきが認められ、発育速度が2～3年遅く晩熟型であった。女性には初潮年齢を聞けばさらに裏付けられるのではないと思われる。

3. 中国農村の児童との比較

今回調査した身長・体重の結果を1987年度の中国農村の平均値³⁾と比較すると、苗族においては男性・女性とも平均より少し値が小さい傾向であった。布依族の場合は男女ともほぼ平均か平均を下回るくらいであった。

中国青少年の体格発育の地域格差についての研究では、都市部と農村部との比較をすると、明らかに農村部のほうが都市部に比べ体格の発育水準が低く、発育速度が遅く、都市部より晩熟型であると報告されている。また、漢人を対象としての調査では、准河流域を境界とする北方地方より南方地方が、また秦嶺を境界とする工業化の進展している東部沿岸が西部内陸地方より形態発育水準が高いことが見いだされており、貴州省は中国の中でも特に形態発育水準の低い地域である⁴⁾。今回の調査結果はそれらの報告と一致するものであった。

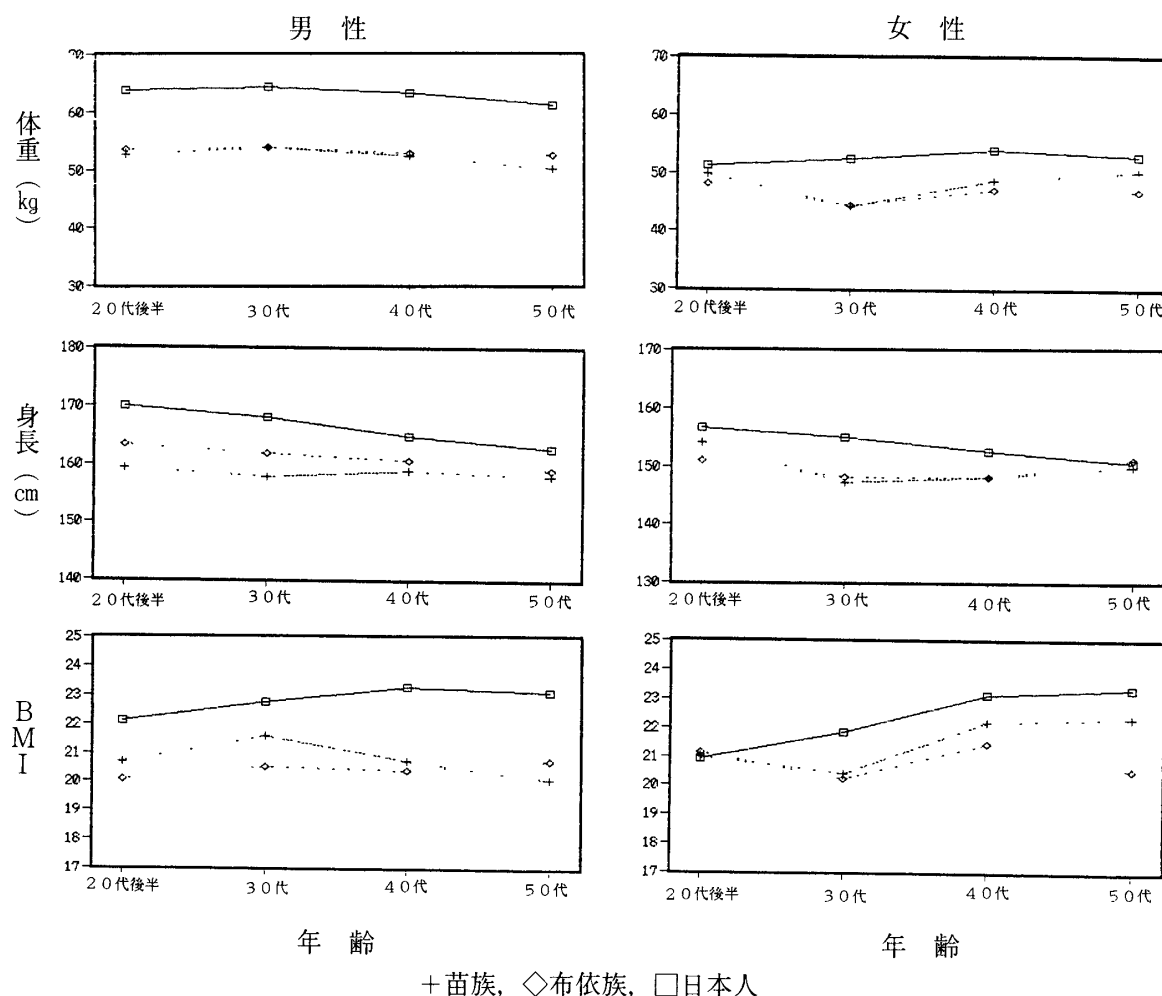


図5 年代別体重・身長・BMIの比較

4. 苗族と布依族の比較

苗族に関しては1900年に鳥居⁶⁾により民族学的な調査がなされている。花苗、青苗、白苗、打鉄苗、独家の総数40名（年齢20-40才）の男性の身長が平均155cm（最高169cm，最低139cm）で、「故に短身に属す」と記載されている。一方女子23名（20-25才）の身長の平均値は145cm（152～138cm）で男子の平均155cmと比較すると10cm低かった。男子の身長155cmという値は今回の調査（1992年）の苗族の身長と比較しても小さい。この間に国が安定し、経済状態がよくなり食生活が向上したと考えられる。

中国少数民族（7才児）体格データのクラスター分析を行なった報告によると、大分類をすれば2クラスターに分割される、即ち北方地域の草原に分布する高長身で大型の肉食民族のクラスターと雲南・広西・西藏に分布する山岳少数民族である⁵⁾。山岳少数民族は更に特に小形の形態を特徴とする雲南少数民族（タイ族、ラフ族、ワー族、ハニ族）と雲南からチベット青海高原などに広がって分布する民族（チベット族、東郷族、サラル族など）の2クラスターに分かれるという。苗族・布依族はともにこの山岳少数民族の后者に分類され、中国少数民族を大きく眺めると、同じような体格の民族ということになる。

今回の我々の調査は、貴州省の同じ地区に住む苗族と布依族を対象として体重・身長を測定した。その結果、女性はそれほど顕著ではなかったが、成人男子の場合苗族よりも布依族で身

長が高い傾向にあり、男子児童の場合も、身長は布依族の男子の方が、苗族より高い傾向にあった。同じクラスターに分類される民族ではあるが、詳細にみると、少し差があることがわかった。これは民族の遺伝的な差による可能性もあるし、また食生活に関連している可能性も考えられる。

体位と食生活、特に関連が深い動物性タンパク質の摂取量を苗族・布依族で比較した。前報に記載されている通り、動物性タンパク質の絶対量の比較はデータの不足で出来なかったが、布依族のほうが苗族より、タンパク質性食品の摂取回数が多く、エネルギーの中に占めるタンパク質エネルギー比が高かった⁷⁾。このことより食生活の体位に及ぼす影響もあると考えられた。今回の苗族・布依族の体位、特に身長の差が民族特有の食習慣に由来しているのか、あるいは経済の差に由来しているのか、今後さらに検討していく課題である。

要 約

中国貴州省西南部の少数民族、苗族・布依族の食生活の一つの指標として、身長・体重を測定した。苗族では男性103名、女性89名、および布依族では男性221名、女性103名を対象とした。その結果は以下のとおりである。

- ①苗族・布依族の体重・身長は、同年齢の日本人の値と比較して、小さかった。小柄でスリムな体形であった。成長期においては、日本人と比較して、発育速度が遅く晩熟型であった。
- ②苗族と布依族を比較すると、布依族のほうが背が高い傾向にあった。特に男性で顕著であった。それと相応して、布依族の方が苗族より、一日当りのタンパク質性食品の摂取食品数の割合が高かった。

(名古屋女子大学生生活科学研究所の機関研究の一環として行なったものである。)

文 献

- (1) 芦田 淳：食生活と栄養，p5-17，同文書院(1991)
- (2) 厚生省公衆衛生栄養課編：国民栄養の現状（昭和62年度国民栄養調査成績），厚生省公衆衛生栄養課(1988)
- (3) 陝西省婦女联合会研究室編：中国婦女統計資料，p1949-89，中国統計出版社(1991)
- (4) 李成葉，大澤清二：学校保健，**35**，194-204，(1993)
- (5) Chebg-ye Ji and Seiji Ohsawa J Anthron Soc Nippon, **99(1)**, 11-22,(1991)
- (6) 鳥居龍蔵：鳥居龍蔵全集11巻，p46-66，朝日新聞社(1976)
- (7) 酒井映子，末田香里，内島幸江：名古屋女子大学紀要，**40**，147～155，(1994)